マルクスの歴史観とポパーの批判

将 積 茂

Marx's view of history and Popper's criticism

Shigeru Shōjaku

はじめに

ポパーによるマルクスの歴史観の批判は非常に多面的であって、その指摘する問題点はきわめて多岐にわたるが、この小論ではそうしたポパーの批判のうち、筆者にとってもっとも根本的だと思われる二点だけを取上げて検討を加えることとする。つまりその第一点は、ポパーが、マルクスおよびマルクス主義の歴史観（かれは歴史主義 *historicism* と呼んで批判する）は厳密な決定論にもとづく歴史的予言であって、それは科学的予測ではない、と批判する点である。次にその第二点は、その歴史観は全体論 *holism* でもあって、それは科学的ではない、とポパーが批判する点である。ここではこの二点にしばってかれの論旨の妥当性を検討することにし、他の問題点については次の機会に譲りたい。なお、この小論は日本科学哲学会（1970）で研究発表をおこなった際の手稿に若干手を加えたものである。

1. ポパーの論点とマルクスの「唯物史観の公式」

まず、ポパーの批判の検討に先立って、ポパーの論点に関係すると思われる、マルクスの歴史観の核心を確認することから始めよう。マルクスの歴史観は周知のように『ドイツ・イデオロギー』で最初の礎石をおかれたが、その成熟した歴史観のかれ自身による一般的結論は、いわゆる「唯物史観の公式」として、『経済学批判』の序文のなかできわめて簡潔に述べられている。したがって、ここではそのなかから、問題とするポパーの論点に特に関連する部分だけを抜き出すこ

とにしよう。「人間は、かれの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意識から独立した諸関係を、すなわちかれらの物質的生産諸力のある一定の発展段階に照応する生産諸関係を、むすぶ。これら生産諸関係の総体は、その社会の経済的構造を、すなわち法制上および政治上の高層建築がそのうえにそびえ立ち、一定の社会意識諸形態がそれに照応するところの現実の土台を形成する。……社会の物質的生産諸力は、その発展の一定の段階において、……現存の生産諸関係と矛盾するようになる。……そのとき社会革命の時代がはじまる。」⁽¹⁾ (傍点筆者)

ここで第一に問題となるのは、「必然的な」、「人間の意識から独立した」生産諸関係の総体が生産力の増大によって、人間の意識的な行為とはまったく無関係に発展する、とマルクスによって予言されていると理解されてよいかどうか、つまりポパーの批判するようにマルクスが厳密な決定論をとっているかどうか、である。そしてポパーのいうように、マルクスの歴史観が厳密な決定論であるとするならば、マルクス主義の実践的命令（これをポパーは能動主義 *activism* と呼んでいる）つまり「世界を変革することが肝要であり」、「万国のプロレタリアートよ団結せよ！」という『共産党宣言』の勧告と矛盾することになるが、その点はどうかということである。

第二には、「生産関係の総体」を変革することによって、プロレタリアートが階級的抑圧から解放されるといういわゆる科学的社会主義は全体論であって、非科学的なユートピア主義でしかないのか、という問題点である。

これら二つの点に関するマルクスのさらに立入った見解は、ポパーの批判に即しながら、その都度、関係する文献から確認することにして、これからポパーの批判の紹介とその検討に移ることにしよう。

2. ポパーによるマルクスの歴史観の批判

なによりもまず、ポパーによるマルクス批判についてあらかじめ断っておかなければならないことは、ポパーはマルクスをけっして全面否定しているのではない、ということである。ポパーはマルクスが社会の科学研究にたいしてなした

貢献をきわめて高く評価しており、たとえばミルのような心理主義的な社会学のアプローチにたいしては断然マルクスに左袒し、「マルクス以前の社会科学へ帰ることなど考えられない」⁽²⁾とまでいっている。

(i) マルクスの歴史観は決定論であり、かれはまず誤った予言者として規定されうる

(a) マルクスの歴史観は決定論である

そのようなマルクスにたいする高い評価にもかかわらず、ポパーによれば、マルクスは誤った予言者 prophet として批判されなければならないのである。それも、マルクスのもろもろの予言が真実とならなかったということが問題であるよりも、マルクスの歴史観によって、歴史的な予言を下すことが社会問題にアプローチする科学的方法である、と多数の知識人に誤って信じさせたことの方がずっと罪が重いというのである。⁽³⁾

たしかに、ポパーもいうように、マルクスが社会主義を原因と結果の分析という科学的方法、つまり科学的予測に基礎づけようと意図したことについてはまったく疑問の余地はあるまい。このようなマルクスの意図をもっとも明白に表明しているのは、エンゲルスが啓蒙的なかれのマルクス主義入門書に付した『空想より科学への社会主義の発展』(傍点筆者)というタイトルそのものであろう。

ところでポパーによれば、マルクスはプラグマティストの先駆者の一人であったのである。あの有名な「フォイエルバッハ・テーゼ」の第11「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したにすぎなかった。しかし肝要なことは世界を変革することである」をポパーは引用して、次のように主張する。「科学のもっとも特徴的な仕事は過去の事実の知識をうるのではなく、将来を予測することである、という後のプラグマティストたちの重要な方法論的教説をマルクスが先取りしたのは、おそらくこのプラグマティックな態度であった」⁽⁴⁾と。

しかしながら、それ自身は重要で進歩的な方法論的発見である、科学的予測にたいするこの強調も、ポパーによると、不幸にもマルクスを邪道に導いたのである。科学は将来があらかじめ決定されている場合にのみ予測できる、というもっともらしい議論がマルクスをして、「厳密に科学的な方法は厳密な決定論に基礎

づけられねばならぬ」⁽⁵⁾ という、誤った信念を堅持させてしまったのである。

だがポパーによれば、決定論は予測をおこなう科学にとって必然的な必要条件ではないのであって、それゆえに科学的な方法は厳密な決定論など採用する必要はないのである。ただし、ポパーは、マルクスが決定論をとったからといって責められない、なぜならかれと同時代のもっとも優れた科学者たちも同じことだったから、とマルクスに寛大な態度を示している。

ところで、このようにポパーはマルクスの歴史観を決定論であると断罪するのであるが、果してこの断定は正しいものであろうか。

(a') マルクスの決定論の弁証法的性格

たしかに、マルクスの文章のなかには決定論を暗示するような主張がいくつも見出されることは事実である。たとえば、『資本論』の第1版の序文のなかにある、「資本制的生産のもろもろの自然法則から生ずる社会的なもろもろの敵対の発展程度の高低は絶対的に問題ではない。問題なのは、これらの法則そのものであり、頑強な必然性をもって作用して自己を貫徹しつつあるこれらの傾向である。産業的に発展した国は発展のおくれた国にたいし、他ならぬそれ自身の将来の姿を示すのである」⁽⁶⁾ (傍点筆者) といった文章や、ポパー自身が引用しているところの同一序文のなかの「たとえ一社会がその社会の運動の自然法則の足跡を発見したとしても、その社会は、自然的な発展段階を飛びこすことも、それらを立法的に排除することも、できない。だが、その社会は、生みの苦しみを短くし、やわらげることはできる」⁽⁷⁾ (傍点筆者) といった文章に見られる「自然法則」、「頑強な必然性」、あるいは「自然史的過程」という種類の表現は、ポパーの断定に十分な根拠を与えるようにも思われる。

しかしそれにもかかわらず、マルクスは他方、歴史にたいする人間の主体的な働きかけについても数多く発言しており、先きの「フォイエルバッハ・テーゼ」の第11はけっして一時的、偶然的な発言ではなく、マルクスの歴史観をつらぬく本質的な主張といわざるをえないのである。たとえば、『聖家族』ではヘーゲル流の「歴史の主体化」を批判して、マルクスは次のように述べている。「歴史は何ごともおこなわない。歴史は『何らぼう大な富を所有しない。』歴史は『何ら

闘争をしない!』すべてこれらのことを、おこない、所有し、たたかうのは、むしろ人間であり、現実の、生きた人間である。『歴史』とは、自己の—こういうとまるで歴史が独自の人格でもあるかのようだが—目的を完成するために、人間を手段としてつかうようなものではなく、歴史とは、自己の目的を追求しつつある人間の行為にはかならない。」⁽⁸⁾ (傍点筆者) また、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』では、次のように述べられている。「人間は自分自身の歴史をつくる。だが思うままにではない。自分でえらんだ環境のもとではなく、すぐ目の前にある、あたえられ、持ち越されてきた環境のもとで歴史をつくるのである。」⁽⁹⁾ (傍点筆者)

つまり、マルクスにおいては、歴史をつくる主体はヘーゲルのように「世界精神」ないし神ではなく、あくまでも生きた現実の人間である。生活するために、すなわち食い、飲み、着、住み、その他のために物質的生活の生産をしなければならぬ肉体的組織をもった個々の人間が歴史をつくってゆくのである。ただし、マルクスによれば、人間が歴史の主体であるにもかかわらず、人間は思うままに自由に歴史をつくりうるのではなく、その意識はかれの社会的存在によって規定され、つねにみずから解決を迫られており、かつ解決しうる問題のみを問題とするのである。そして人間にとって、問題はつねに、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、あるいは少なくともその生成の過程にあるか、のばあいのみ、はじめて発生するものなのである。したがって、その物質的条件が十分に整っていないばあいには、人間(階級)の主体的な行為は成功しないのである。

『共産党宣言』のなかで、マルクスはそういった例について述べている。「封建社会が転覆された一般的な激動の時代に、直接に自分自身の階級的利益を貫徹こうとしたプロレタリアート自身がまだ未発展な状態にあったのと、その解放の物質的諸条件が欠けていたために必然的にやぶれた。これらの物質的諸条件はこれからブルジョア時代によってつくりだされねばならなかった。」⁽¹⁰⁾

以上のマルクスの若干の文章やその他からして、ほぼ結論的に次のようなことがいえるのではなからうか。つまり、マルクスの歴史観の基本的性格として、たしかに、社会の発展は一般的には生産力の増大に照応して、一定の時期に生産

関係が変革されるという、普遍的なコースを予言する決定論の一種である、といえよう。しかし、その決定論は将来がすべてあらかじめ決定されているという、厳密な意味での決定論ではなく、その普遍的法則ないし決定論は、もろもろの国民は個人的、階級的な人々の意志や行為によって、その時々にあたえられた物質的諸条件、つまり生産力や生産関係に働きかけることによって、それぞれの時代、国々の歴史をつくってゆくという特殊性ないし偶然性をふくむものである、⁽¹¹⁾ というべきであろう。

(b) マルクスの決定論は能動主義と矛盾する

しかし、ポパーはマルクスの歴史観をただ決定論として断罪することによって、次のようにマルクスの主張に矛盾があることを指摘するのである。「マルクスの社会科学の目的についての歴史主義的見解は、はじめかれをして科学の予測的機能に強調を置かせたプラグマティズムを大きく覆すものである。歴史主義的見解は、科学は世界を変化さすべきであり、かつ変化させうるとする、かれの初期の見解の修正を余儀なくさせる。なぜなら、もし社会科学が、したがって歴史の予言が、存在しうるとするならば、歴史の主要なコースはあらかじめ決定されておらねばならず、善意も理性もそのコースを変える力をもたないからである。」⁽¹²⁾ と。

(b') 矛盾はマルクス主義者にとって存在しない

ポパーが指摘する、歴史のコースが決定されているという予測と、世界を変化させることとの間にあるという矛盾は、一見たしかに矛盾しているようにみられるが、これは視角が変われば、すなわちマルクス主義者にとってはなんら矛盾とはならないのである。つまり、歴史のコース、社会主義へのコースが必然的に決定されていると予測されても、先きに述べたようにそれは社会主義実現のための物質的諸条件が存在することが予測されているにすぎず、その条件を成熟させ、社会主義社会へ世界を変化させることはそれぞれの国民の階級的実践、行為にかかっているのである。社会主義社会を実現することを問題として課せられた階級にとって、かれらによる世界の変革とは、まさにその予測されたコースを進みかつその歩みを促進することであって、けっしてそのコースそのものを変革するこ

とではないのである。したがって、マルクス主義者の視点からすれば、そこに矛盾を感じるポパーの理性は、あたえられた物質的諸条件を無視する恣意でしかないであろう。この点に関して、E. H. カーも次のように批判している。「人間の行為が原因を待たず、したがって、決定されていないというような、そんな人間は……一つの抽象的観念であります。『人間の世界ではすべてのものが可能である』というポパー教授の主張は、無意味であるか、さもなければ、間違っています。」⁽¹³⁾

(c) マルクスの歴史的予言は科学的予測から引き出されえない

さて次に、ポパーのマルクスの歴史観を決定論だと批判する立場は、さらに、マルクス主義の歴史的予測が非科学的であることを論証しようとするのである。ポパーによれば、マルクス主義が提出する種類の予言は、その論理的性格からいって、現代科学の予測 predictions であるよりも、旧約の予言 prophecies により近いものである。かれによれば、科学における通常の予測は条件的 conditional である。そして無条件的予測も時としてこれらの条件的な科学的予測から、当の条件が満たされていることを主張する歴史的命題と結合されて、引き出されうるのである。たとえば、もし医者が患者をしょうこう熱だと診断すれば、かれは医学の条件的予測の知識のたすけをかりて、かれの患者にある種の発しんが生ずるだろうことを無条件的に予測しうるのである。つまり、いくつかの前提条件から、われわれは無条件な予測を肯定式 modus ponens によっておこなうことができるのである。⁽¹⁴⁾

患者はしょうこう熱にかかれば発しんする（条件的予測）

患者はしょうこう熱にかかっている（条件の満足）

患者は発しんする（無条件的予測）

$$\begin{array}{rcl}
 p \supset q & & \\
 \underline{p} & & \text{(modus ponens)} \\
 \hline
 \therefore q & &
 \end{array}$$

ところが、歴史主義者であるマルクスおよびマルクス主義者は、第1に、かれらの歴史的予言を条件的予測から引き出さない。第2に、これは第1から結果す

るのだが、長期的な予言は、それが十分に分離させられた *well-isolated*、変動のない *stationary*、循環的な *recurrent* のものであると叙述されうるようなシステムに適用されるばあいには、科学的な予測から引き出されうるから、歴史主義者はかれらの歴史的予言を科学的予測から引き出しえないのである。というのもこのようなシステムは自然現象のなかでは非常にまれなものであり、そして現代社会がこの種のシステムに属していないことはたしかである、とポパーは論じる。かれによれば、こうしたまれな例としては、日、月食の予言があり、生物学の領域での有機体の生命のサイクルについての予測などが挙げられる。そして、前者が可能なのは、太陽系が変動のない、反復的体系だからであり、後者のばあいは、その生命のサイクルは半ば静止的 *semi-stationary* ないし、非常にゆっくりと生物学的事象の連鎖を変化させているので、その変化を捨象しうるかぎりでの科学的予測が可能なのである。

ところが、社会は変化し、発展している。この発展は概して反復的ではない。その諸条件は変化し、以前に起ったこととは非常に異った状況がつねに生じる。したがって、われわれが食を予測するという事実は、だからといって革命を予測しうる期待にとって妥当な根拠を与えるものではない、とポパーは論じるのである。⁽¹⁵⁾

(c') コンフォースの反批判とその問題性

マルクス主義者のコンフォースは、ポパーのこの点の議論について、「非反復的發展とは法則が存在しないことを意味しないし、発展の現段階の分析から次の段階の予測がなされうるような仕方では法則が定式化できないことを意味しない」⁽¹⁶⁾と反論を試み、マルクス主義における長期的予測も条件的予測であると論じている。しかし、筆者のみるところでは、コンフォースのこの点に関する論証は不十分といわざるをえない。ポパーのこの論点に関する、より説得力のあるマルクス主義者の反論が必要であると思われるし、理論の科学性を厳密に求める分析的な非マルクス主義者を十分に納得させるためにも、マルクス主義の歴史観における無条件的予測の諸命題が条件的予測命題と当の条件命題とに分析されてゆくことが必要であらう。ポパーのこの点に関する批判はマルクスの歴史観をより

明晰なものにする手続きとして、きわめて重要な指摘であると思われる。

- (ii) マルクスは全体としての社会の発展に関心をもつが、そのような「全体」は科学的探究の対象とはなりえない

ポパーは歴史主義者マルクスの歴史観をさらに全体論 holism と規定し、その批判をおこなっている。この第二の批判点について検討してみることにしよう。ポパーの全体論批判には、かれの漸次的工学 piecemeal technology という方法論が前提されているので、まずこの漸次的工学というかれの考え方からみてゆくことにしよう。

- (a) ポパーの漸次的工学

かれは社会工学 social technology ないし社会技術 social engineering という用語のもつ望ましくない連想にたいする配慮から、(1)「漸次的」という語を特にならんで工学につけ加え、自己の立場を鮮明にしようとする。この配慮は次のようなポパーの根本的な科学観から由来するものであろう。かれはマンハイムを批判する際の注で述べている。「K. マンハイムはコントに似てくはないやり方で、思想の発展に次のような三つの『レベル』を区別する。(i) 試行錯誤あるいは偶然による発見、(ii) 発明、(iii) 計画。わたしはかれの主張と意見を異にすることはなほだしいで、(i) の試行錯誤の方法がわたしには、他の『レベル』のいずれよりも、もっと科学の方法に近いように思われる。—社会科学に対する全体論的アプローチを前科学的だとみなすいま一つの追加理由は、そのアプローチが完全主義のある要素を含んでいることにある。しかしわれわれが地上に天国をつくることができず、物事を少し改善することができるだけだ、ということをはたと悟るならば、われわれはまた物事を、少しずつ漸次的に改善しうることを悟るのである。」⁽¹⁷⁾ と。ここには、あのフランクリンの「鍛冶屋と斧磨ぎを依頼した男」⁽¹⁸⁾ のたとえ話にみられるようなイギリス人の改良主義 meliorism の精神がみなぎっているのである。

次に、かれの(2)社会「工学」ないし社会「技術」の語のもつ意味について検討することにしよう。「ちょうど物理的技術者の主要な課題が、いろんな機械を設計したりそれをつくり直したり世話したりすることであるのと同じように、漸次

的社会技術者の任務は、いろんな社会制度を設計した既存の諸制度をつくり直したり運営したりすることにある。」⁽¹⁹⁾ そして社会工学者ないし技術者は制度というものを、「機能的」ないし「道具的」見地からみようとするのである。つまりかれらは、ある目的にいたる手段として、あるいはある目的に役立つ方向へ変換可能なものとして、要するに有機体としてよりはむしろ機械として、制度を考えるのである。ポパーによれば、漸次的技術者に特徴的なアプローチは次の点にある。つまり、かれらは「全体」としての社会になんらかの理想をもつにしても、「全体」としての社会を設計し直す方法があることを信じない、という点にあるとされる。かれらはその目的がなんであろうと、つねに改善してゆくことが可能であるような、小さなさまざまな調整や再調整をおこなうことにより、その目的を実現しようと試みるのである。かれらにとって肝要なことは、「誤りを通じてのみ学びうる」ということである。したがって、かれらは「予期した結果を達成された結果と綿密に比較しながら、一步また一步と自分の道を歩み、どのような改革についても避けることのできない望まれざる諸帰結、というものにつねに注意を怠らない。そして原因と結果を解きほぐすことを不可能とするような、また自分が本当は何をやっているのかを知ることが不可能となるような、多大の錯綜性と規模とをもつ改革は企てようとはしないであろう。」⁽²⁰⁾ (傍点筆者)

結局のところ、ポパーの漸次的工学が意味するのは次のようであろう。まずその工学ないし技術の対象は、有機体としての社会全体ではなくて、機械としての制度のシステムである。全体としての社会改革はその規模の大きさや錯綜性からして、その目的が成功であるか失敗であるかのテストが不可能であり、テストの可能性をもたぬことは科学として致命的な欠陥である。漸次的工学者はその目的実現のために、改革の結果のテストの可能な小さな改善を積みかさねてゆくのである。

(b) 「全体」の二つの意味の区別

まずポパーは、全体論者 holists の「全体」「Whole」という語の使用法が曖昧であるとして、それを整理して、次の二つに分類する。

(1) 「ある事物のあらゆる性質もしくは様態の総体、そしてとくに事物を構成す

る諸部分の間になり立つあらゆる関係の総体。」

(2)「当該の事物のある特別な諸性質 もしくは 様態、すなわち その事物をして『単なる堆積物』よりはむしろ、一つの組織された構造と見えさせるような、特別な諸性質。」つまり、ゲシュタルト、構造上の規則性など。⁽²¹⁾

ポパーは両者を明確に区別することを強調して、次のように主張する。(1)の意味の全体と(2)の意味の全体とは鋭く区別さるべきであり、(2)の意味の全体が科学的に研究できるからといって、それと全然異った主張である(1)の意味での全体が科学的に研究できるという議論を正当化することは許されない。実際に、どんな小さい事物でさえそのまゝごとを叙述することはできない。なぜならすべての叙述は、必然的に選択的なものだからである、と。

(c) コンフォースの反論

ポパーを直接反批判しているコンフォースの反論をまずみてみよう。かれはいう、マルクスはたしかに「全体としての社会の発展」に関心をいだいた。しかし、マルクスが全体としての社会の発展に関心をもったのは、たとえば生物学者が全体としての有機体の成長に関心をもちつと同じ仕方である、と。コンフォースによれば、それゆえこのことはマルクス主義者も生物学者もひとしく全体論者とするとはできないのである。また、諸様相を排除して全体に関心をもちつということでもないのである。というのは、全体が部分の複合した相互関係の産物であることは、マルクス主義者も生物学者も共に完全によく承知しているからである。生物学者は有機体を相互関係をもつ生きた細胞の複合と理解し、マルクス主義者も同様に社会を相互関係をもつ生きた個人の複合と理解するのである。

しかし、コンフォースによれば、マルクスの社会の研究は、重要な点において、社会を生物学的有機体とは異ったものとして扱っているのである。マルクスの社会観は、社会を構成するところの個人の諸関係を探究することにより到達されたものであって、社会と有機体との抽象的な比較から演繹されたものではないのである。そして、その探究の結果として、社会を変革するためになすべき肝要なことは、生産力に適合するように生産関係を変革することであると見出すが、しかし、マルクスは人々が「まず『全体』を変革すべきであり、ただそうするこ

とによってのみ『諸様態』を変革しうる」などといいはしなかったのである。コンフォースによれば、マルクスは全体がどのように構成され、かつ発展するかを見出すために、社会のさまざまな様態を研究し、この研究から全体的発展を決定する基本的諸関係 key relations を発見し、社会を変革するためには、人々はこれらの基本的諸関係をどのようにして変革するかを見出すことに集中すべきであるといったのである。⁽²²⁾

結局、コンフォースによれば、ポパーによる全体論としてのマルクス主義と反全体論としての科学との対立はまやかしのものでしかないのである。『歴史主義の貧困』におけるポパーの全体論批判を検討するばあい、その批判の対象として論及されているのは主としてマンハイムであり、マルクスはただ暗示されている⁽²³⁾（本書全体がそうした傾向をもっているが）にすぎぬことが見出されるが、筆者としても、この点に関するポパーのマルクス批判の妥当性の乏しいことを否定せざるをえないのである。つまり、ポパーは「全体」を分類して、(1)「『ある事物のあらゆる性質もしくは様態、あらゆる関係の総体』としての全体」が科学の対象にならないとし、それをあえて試みるものを全体論と名づけて否認したが、およそマルクスがそのような意味での全体論者であるとの論証は不可能であるに相違なからう。

結 び

以上、ポパーによるマルクスの歴史観の批判を二点にかぎって検討してみたが、なお論及し残してしまった問題点もあり、稿を改めて次の機会にその検討を試みたいと思っている。

注

- (1) M.E.W.B. 13, SS. 8~9.『経済学批判』青木文庫 19頁
- (2) K. Popper, *The Open Society And Its Enemies*, Vol. 2, p. 82.
- (3) K. Popper, op. cit., p. 82.
- (4) K. Popper, op. cit., p. 84.
- (5) K. Popper, op. cit., p. 85.
- (6) M.E.W.B. 23, S. 12.『資本論』青木文庫(1) 71頁.

- (7) M.E.W.B. 23, SS. 15~16. 『資本論』(1) 73頁.
- (8) M.E.W.B. 2, S. 98. 『聖家族』岩波文庫 160頁. なお, Franz Marek, *Philosophy Of World Revolution*, p. 48 参照.
- (9) M.E.W.B. 8, S. 115. 『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』岩波文庫 17頁.
- (10) M.E.W.B. 4, S. 489. 『共産党宣言』青木文庫 51~52頁.
- (11) Franz Marek, *op. cit.*, p. 42. M.E.W.B. 33, S. 209. マルクスはクーゲルマンへの書簡で, 偶然性の果す役割について触れている.
- (12) K. Popper, *op. cit.*, p. 86.
- (13) E. H. Carr, *What Is History?* p. 87. 『歴史とは何か』岩波新書 136頁.
- (14) K. Popper, *Conjectures And Refutations*, p. 339.
- (15) K. Popper, *op. cit.*, p. 340.
- (16) M. Cornforth, *The Open Philosophy And The Open Society*, p. 142.
- (17) K. Popper, *The Poverty Of Historicism*, p. 75. 『歴史主義の貧困』中央公論社 119頁.
- (18) Franklin, *Autobiography*, 『フランクリン自伝』岩波文庫 144頁.
- (19) K. Popper, *The Poverty Of Historicism*, p. 64~65. 『歴史主義の貧困』103頁.
- (20) K. Popper, *op. cit.*, p. 67. 『歴史主義の貧困』106~107頁.
- (21) K. Popper, *op. cit.*, p. 76. 『歴史主義の貧困』120頁.
- (22) M. Cornforth, *op. cit.*, p. 161~162.
- (23) 全体論者の論理が弁証法である, とポパーは注をしており, 参照を指示されている論文 “What is dialectic?” がヘーゲルとマルクスを扱っている以上, マルクスが批判の対象に含まれていることは明らかであろう.